

○開会の挨拶

西岡議長「3年しか続かない委員会が多い中で、この会議が10年も続いているのは皆さんの力で常に改革・発展させていたからだと思います。

私たち世代は孫も出来て、進路や職業についての相談も受けて意外と子どもとの接点があります。ゲームに関してもコンピューターゲームから離れて、百人一首や将棋などを教えたりすると尊敬されます。中高生になった孫は偉そうな態度をとることもあり、苦労することもあるでしょう。そのような『子育ての支援』も話していく中で、膨らませていただいたら、気持ちの持ちようで前向きにやっていけるのだと思います。(自分の)娘や息子がそれにあたりまえの顔をして、「ありがとう」なんて言わないのが一番おじいちゃんおばあちゃんにとって気になることなので、卒業生には『ありがとう』言いや」と言い聞かせる、これも一つの学習だと思います。

『子育て』の時のことを思うと、この「ほっこり子育てひろば」がいかに重要かわかってきます。そういう意味で今後も10年と言わず、いろんな形でいろんな策を取りながら拡充させていただけたらと思います。」

○平成29年度実施実績及び平成30年度実績状況

「ほっこり子育てひろば」

(資料2)「3 具体的なプログラム」の「実施状況」を見ると、平成22年度から実施回数・参加人数共に着実に増加している。29年度については、前年度比では若干減少しているが、子どもの数が減少している中で、一昨年度と比較しても1,000人増のレベルを維持している。なお、平成32年度時点での京都市の目標数値は年間2万件となっている。

また、(1)(2)に書いてあるとおり、親のためのプログラムだけでなく、親になる前の青少年のための親学習プログラムとして中高生を対象とした教育の充実など、切れ目のない取組として定着してきた。

(資料3) 29年度実績を28年度のものと比べると、参加者数としては900人弱減っている。さらに細かく見ると、幼稚園や福祉保健センター等で若干減少しているが、経年で見ると年によって上下しているところもあるので、一時的なものではないかと考えている。反面、保育所やつどいの広場等で増加しているのは、それぞれの機関が既存の事業または新たな取組として、実践事例を参考に積極的に取り組んでいただいた結果だと考えられる。また、小学校に関しては他の実施機関とは異なり、ボランティアの支援者がファシリテーターとして活躍している。平成28年度から実施している30分程度の短時間プログラムを導入して以来、次の年度に入学する新1年生の多くの保護者があつまる就学時健康診断や入学説明会等の機会を利用して実施する小学校も増えた。小学校のPTAが主催する研修会や、行政区内のPTAの指導者が集う研修会でプログラムを取り入れていただく等、学校以外での実施もあった。

今年度9月末の実施状況は、事務局に報告が上がっているもののみを計上しているため、9月

までに実施されたものでも、まだ計上されていない場合がある。

(資料4) (妊娠乳幼児期) 各施設からの報告書の中にも、参加された保護者の声が記載されているものが多く、この「ほっこり子育てひろば」が子育てに悩んだり孤立した保護者にとって、救いの場になっていることがよくわかる。

今年度の途中集計のものは29年度と同じような傾向になっている。

28年度から、「ほっこり子育てひろば」の運営の参考となるように「ほっこり子育てひろばニュース」を発行している。みらい館でのプログラムの様子や実施施設の取組事例等を紹介している。

(学童期) 内容・時間・支援者の進め方に対する満足度は高く、妊娠乳幼児期と同様の傾向を示している。経年で見ても高い水準で安定しており、数年で大きな変化はない。学童期の特徴としては、元々は90分のプログラムを基本としながら、60分版として再構成したり、30分程度の短時間プログラムを作成することで、様々なニーズに対応できるようにしている。プログラムの時間に関する質問(Q7)に「ちょうど良い」と答えた方が81.6%と28年の77.9%から3%以上増えていることから、事業の実施側が参加者のニーズに合わせてプログラムを選択していることがうかがえる。また30年度の間接報告ではさらに「ちょうど良い」の割合は増加して、86.3%となっている。また、満足度に関する質問(Q11)は例年「良かった」「わりと良かった」の合計が95%を超えている。プログラムを通して新たに気づいたことがあったかという質問(Q10)も75%以上を維持している。こういった部分が満足度に繋がって、さらに継続して家庭教育講座や学校等で取り組んでいただくことに繋がっていると考えられる。

(広報誌) 学童期の方でも「ほっこり子育てひろばニュース」を発行したり、チラシも作成して、放課後連携教育主事が中心となり学校等に働きかけ、こういったプログラムを活用いただけるように周知している。さらに、今年新たな取組として、「ほっこりつうしん」を作成した。これは、学童期のプログラムで活躍していただいている支援者の方々が他の支援者の実践事例を知る機会があまりないということで、支援者同士の事例研究に役立てていただくために作成したものである。

【意見・質問】

長谷川氏「自分が子育てをしている時、先輩ママや同じような悩みを持つ方たちとの話し合いとか助け合いみたいなものに助けられ、親同士の顔を合わせて知恵を伝えて助け合うために、はのんの会を作りました。その縁でプログラムの作成から参加し、実施においても数名がファシリテーターとして活動しています。お母様方に楽しく話をしていただこうと覚悟をすると、お母様方の中にも色々な方がいらっしゃる上、時には50人を超える方を相手に、話し合いの場を作っていかなければいけないということで、ファシリテーターの方もやせる思いで活動させていただいています。ですが、アンケートの集計結果にもあるとおり、「来てよかった」、「ずっと子どもの事怒ってばかりいたけれど、しっかり話を聞いてあげなくちゃいけないなあ」、それからお母さん同士で「こんなこと人に訊くのってどうだろう」ということでも来て話すだけで大分楽になったとか、学校の中で親同士が繋がる機会がないので、わざわざこういう安心して話ができる場を作ることの大事さを感じます。参加人数は増えているようにも見えますが、まだ

まだ参加したことのない方もいらっしゃるし、一回だけ参加して、その時は「そうだなあ」と思っても日常に戻ると忙しさを忘れてしまうこともありますし、またご夫婦の話もこの機会に話し合っていていただいて家庭の中での交流を増やす助けになると良いなあと思います」

丹所氏「私たち京都府助産師会は会館を持っております、そこで様々な事業をやっております。会員の助産師が例えば、親業コミュニケーション講座のようなことを開催し、そこにお母さんたちが参加したり、助産師の個人授業と言って各得意分野や性教育についての講座もやっております。そのようなことは、こちらに計上したほうがよろしいのですか？」

上田部長「こちらに載せている「ほっこり子育てひろば」はそれぞれのテーマやワークシートを使うことを基本としているものをカウントしているのですが、これに類似したものをどうカウントしていくのかは今後の課題かなと思っております。また、性教育に関する話もありましたが、それに近いのはこの後紹介する「次世代はぐくみプロジェクト」ですが、それと連携というかわりが出てくると思いますし、今後その取組をどうカウントしていくかも課題かなと思っております。」

丸橋氏「以前の会議で「ほっこり子育てひろば」を土曜日にやってほしいという議論があったと思うのですが、専業主婦が減りお母さん方も本当に忙しくなっている中、父親はどれくらい参加しているのでしょうか？」

荒武氏「こどもみらい館では月に一回日曜日に「お父さんといっしょ」という井戸端会議をしています。この頃参加者が多くなり、奥さんに「もっとしなさいよ」と言われるよりもお父さんたちに「もっとやらなあかん」と助言をいただいてかなり刺激を受けて、いろんな情報交換を自分達でされています。それがみらい館の中では一番大きい事業ですが、他には多胎児の井戸端にも土曜日・日曜日に開催するとかなり一緒に来られて、夫婦で来られるほうが色々な話ができるのでこちらも色々と提案して交流していると時間が足りないほど参加されています。平日はやはり少ないですが、夏休みなどでもお父さん単独で来られることは増えております。ただ、「ほっこり子育てひろば」は土日にはやってないので、そこも今後やっていかないといけないのかと思っております。」

内山氏「お父さんの参加に関してはどこの保育園でもやっています。テーマの見直しとかどうしようかという部分もありますが、その点については各保育園いろんな取組をやっています。だから実施に関してはこのプログラム以外であれば倍くらいの回数になっていると思いますので、報告については今後検討の余地があると思っております。各イベントでもお父さんを引き込もうということは努力していますので、そういう意味では子育てへの関心は昔に比べればかなり増えてきていると思います。」

「青少年と乳幼児のふれあい事業」

(資料5) (児童館) 中高生というくくりで開催しているので割合はわからないが、児童館を利用している小学生が活動の様子を見て「乳幼児さんかわいいな」「自分が大きくなって中高生になったら、同じように関わりたいな」と中高生になった時にこの取組に参加するということもある。

事業の流れとしては、年間を通してということで出来る限り同じ中高生が関われるように行っ

ている。乳幼児は午前中が活動の中心となるが、中高生の学校のことも考えて夕方になったりと時間の設定がうまくいかない部分もあるが、土曜日や長期休業を使いながら取組を行っている。

今年度の報告会に、中高生の時にこの取組に参加した方が、現在子育てをしている方が来て下さり、今度は乳幼児を連れて児童館を利用しているということで、地域の中で自然と乳幼児親子と中高生が関われる場所となっている。

（中学校）各家庭の環境やプライバシーには十分配慮しつつ、中学生の自分がこれまで成長してきた過程を振り返って、自分の生活は家族に支えられてきたことを理解することを狙いとして、授業の中で乳幼児と触れ合う機会を持つようにしている。

（資料6）「体験型思春期健康教育」は1時間半から2時間程度の教室というイメージ。実績としては28年度から4回増えており、こういった教室を開きたいという希望に沿って開催するもので、需要が少しでも増えたと前向きに捉えている。また市内の保健師を養成している大学等に呼びかけて、事業説明会に参加した方にはボランティアとして、ライフデザインや妊娠・出産・育児に関わる知識の啓発に一緒に取り組んでいただいている。大学生のボランティアは、現在29名の登録がある。

【意見・質問】

三浦氏「（資料5-1の補足として）報告会に、中高生の頃にこの取組に参加したことのある方に来ていただいたのですが、この事業が本当に自分の児童館との関わりのなかで大きな一つの柱となっていて、自分の兄弟や親戚の子ども達と接する時に自然と壁の無い気持ちでいけるし、早く自分も子どもが欲しいなという気持ちになるということも感想としていただいています。また、この報告会は対象施設50館だけでなく、京都市にあるすべての児童館の職員を対象としております。指定を受けていない館の職員からも、児童館の対象である0～18歳がイベントの中で自然と交流できるようにしているので、そういった類似する事業もこの対象としてカウントしないのかと声が上がっています。

また、10月に厚労省の方から「児童館ガイドライン」が新たに内容を充実したのですが、その中でも児童館の事業として思春期児童と乳幼児の交流をスタンダードにしていくべきだと打ち出されておりますので、この事業自身の今後の発展のさせかた、方向性についても考えるべきだという意見がでております。」

池上氏「東山区では医療衛生コーナーと連携して区内の中高校を対象に思春期健康教育を、健康長寿推進課と連携してセミナーを行っています。思春期健康教育では前半の妊娠から出産、その後の生活についてははぐくみ室の保健師が担当し、性感染症とその予防については医療衛生コーナーの保健師が担当しております。今回は学校からの要請もあり、LGBTへの理解ということで性の多様性についても講義の中で触れました。性感染症については感染伝播の実験を行いました。講義を聞くだけでなく実験をすることで生徒たちも自分自身の体や心を守ることはもちろん、相手のことを思いやり大切にすることも考える機会となっております。今年度は東山区内の高校2校と、中学校2校を対象に行いました。防煙セミナーは中学1年生を対象に体験コーナーを行っております。これも参加型で、NPO 京都禁煙推進研究会のご協力の下、ポスターや展示物、またスモーカーライザーという呼気中の一酸化炭素の濃度を測定できる機器を生徒

たちが体験して、自分が吸っていなくても受動喫煙しているということを数値で見て実感してもらうことができました。こうしたことが、将来自分もしくはパートナーが妊娠したときに、煙草が与える影響を考える一つのきっかけにもなったかなと思います。中高生が心身ともに健やかに成長して、命の大切さを考えたり、将来を通じて健康を保持できるような取組も今後考えながらしていきたいと思います。」

○今後の取組について

（資料7）こどもみらい館では、「ほっこり子育てひろば」の件数・内容を充実するために、28年度からこどもみらい館で実施する「ほっこり子育てひろば」のモデル事業の見学をお願いしていたが、お忙しい各施設の職員の方に来ていただくのはハードルが高く、今年度は現段階で2件2名の見学を受けるにとどまっている。そこで、平成29年度からご協力いただける地域・施設に出向いても実施し、近隣の事業所からの見学を募り、内容等をほっこりニュースやホームページで紹介し、「ほっこり子育てひろば」の普及拡大と取組内容の充実を目指している。

○プロジェクト会議の今後のあり方について

（資料8）平成20年10月の発足から10年が経過する中で、「ほっこり子育てひろば」の作成段階を終え、取組状況の報告、検証が中心となってきたことから、プロジェクト会議の機能を、今年度新たに設置した「京都市はぐくみ推進審議会」に移行し、より幅広い議論を展開できる会議へ再構築することについて提案する。

「京都市はぐくみ推進審議会」は「京都市未来子どもはぐくみプラン」、「京都市ユースアクションプラン」、「京都市貧困家庭の子ども青少年対策に係る実施計画」という大きな3つの計画を一体化させて新たな計画を策定するために設置されたものである。現在はニーズ調査中で、具体的な内容等は来年度にかけて策定していく。

「京都市はぐくみ推進審議会」は非常に幅広い計画であり、ここで推進していく施策・事業等を検討していくという形になる。現在は9つの部会を設置している。この『親支援』のプロジェクト会議において取り組んでいる様々な分野における「親育て」を、より普及・啓発するために新たな部会である「親育ち促進部会」を設置し、そこでプロジェクト会議の機能を継承し、引き続き「ほっこり子育てひろば」の取組状況の報告・検証等、各事業の普及・啓発や親支援全体の促進や今後の在り方を検討していきたい。

それぞれ確立されてきているようなプログラムもあると思うが、例えば「ほっこり子育てひろば」なら「もっと短い時間にできないか」等プログラムを実施していく上での課題もある。こういった部分には、このプログラムに従事している方の意見等も聞きながら検討することが必要だと考えられる。他の分野の取組に関してもコアな部分については、従事者の方と意見交換する場を出来る限り作り、その中でより濃いものを作っていきたいと思っている。

【意見・質問】

丸橋氏「うちのNPO法人（おふいすばわーあっぷ）も不登校の子どもを持つ親の支援をやりました。多くの方が心配していたのは、思春期に問題を抱える子ども達は妊娠中からどのように育ってきたのか。毎日の積み重ねで思春期に問題を起こし、（その後も）また社会に関わらず……という

こともありますし。私は、親が変われば本当にいろんなものが変わるな、と思います。

自分の輝く場を持っている親は、子どもとの関係も良好だし、子どもにも輝く場を作ってあげられる。けれど、初めて親になったときは何も分からないし、誰も教えてくれなくてしんどい。それで、子どもにあたってしまうような……親を——特に母親を育てるためにどうすればいいか、これをしたほうがいい、というのが無いのがいつも疑問でした。親がいろんな点で、「こうしなければいけない」ではなく「こうしていきたい」（と思った）その時にどうすればいいかというのが相談できないという相談は多いです。親の年齢や、育ってきた環境に大きな幅がある社会ですので、いろんな点でこの「親育ち促進」に期待したいと思っています。親を支援しなければ、子ども達の未来はないと思っていますので、そのような場で少しでもみなさんから良い意見が出てくださると良いと思います。」

丹所氏「資料1の構成そのままに新しく設置される審議会に丸ごと移行されるという認識で良いのですか？」

奥山係長「参考2に載っていますように、この審議会全体の中の一つの部会なので、今のこのプロジェクト会議のメンバーが全員入るというものではございません。具体的な議論を進められる程度の人数に絞った形になると思いますが、ここにいらっしゃるそれぞれの団体（一部除く）はこの審議会の部会あるいは全体会に入っています。ですので、この「親育ち促進部会」で集中的に議論いただくと共に、他の部会と合同部会をしたり、あるいは全体部会で意見集約を図っていくので、そういう意味では、なんらかの形でこのメンバーに関わって頂くと思います。その中で特に部会に入って頂くメンバーは絞っていく必要があると思っています。

（団体側が特に動く必要はないかという質問に対し、）助産師会さんの場合、既に「親子いきいき保健部会」に特別委員としてご参画をいただいているので、同じ方にご参画いただくか、もしくは改めて特別委員として違う方を当てていただく方が適当だということがあれば、そこも含めて各団体さんと調整をさせていただいて「親育ち促進部会」のメンバーを決めていきたいと思っています。」

○会議全体に対する議長のコメント

西岡議長「老婆心ながら10年で終わったら困るな、と心配していましたが、このような形で発展していくことは拡充が担保されたことだと理解しています。今後の発展が期待できると思います。それから、成人教育の神と呼ばれるマルコム・ノウルズは「誰が成人教育を導くのか」ということをいつも問うていました。今思いましたら、支援者の方を中心に、これまで努力された方が、生涯学習の指導者であったり、創造者であり、推進者であると思います。私たちの人生は短いですが、長い歴史で見ても、（この親支援プログラムは）京都の中の参加型の親が育っていく生涯学習として歴史的な活動だと思います。今は目の前のことばかりでわかりませんが、俯瞰して見たら、10年のこの活動、そしてこれからの活動というのは大変期待が持てるものだと思います。」

○閉会の挨拶

永田館長「私自身はまだ新米の館長でこの会議も3回目ですが、長い歴史の本当に後半部分を同席させていただき、長年にわたる熱心な御活動に深く感銘を受けております。

親自身が喜びと共に子どもを育ていけるよう、親としての心構えを身につけると共に、当然生まれてくる不安や疑問・悩みを乗り越える場として「ほっこり子育てひろば」がより充実したものになることを期待しております。私もこどもみらい館の館長として、現場のスタッフがきめ細かく事業を立ち上げている様子、アンケートにもあるようにお母様方が同じ時代に子育てするものとして他のお母様方のお話を聞けて本当に良かったと思っている様子、また、場を設定する方々が、「やっぱりこういう場は必要なんだ」と私どもに感謝の言葉を述べてくださるのをお聞きしてまいりました。

先程も報告いたしましたように、各事業施設から頂戴したご報告書をもとに「ほっこり子育てニュース」を発行しております。ニュースとしてまだまだ全てではありませんが、こんなに情報が飛び交って、メール等で顔の見えない人の意見を聞く時代になった中で、しっかりと目を見てその方の声を聴いて、その方の思いを時差無く受け止めることの大切さを感じております。また、後半には本プロジェクト会議の今後の在り方につきましてご報告を頂戴しました。プロジェクト会議はこれまでの成果を継承しながら、親支援プログラムのさらなる進化を目指して、今後も幅広い議論がされることを期待しております。

結びにあたりまして、本日ご出席の皆様には、引き続き育児に不安を持つ保護者の方々の支援にご協力いただけますようお願い申し上げます。」